

「坂の上の雲」—— その物語のなかに、

司馬遼太郎さんが松山のために残してくれた大いなる遺産を読み取ることができます

<大いなる遺産>

司馬遼太郎さんの代表作のひとつ「坂の上の雲」は、松山出身の秋山好古・真之兄弟、正岡子規という3人の若者が主人公となっています。物語では彼らが新しい国家の建設に尽くしたり、ふさわしい文化を育むために奔走したりする姿が生き生きと描かれています。

3人のめざましい活躍はよく知られています。軍人になった秋山好古は、ほとんど何も無いところから陸軍騎兵部隊を世界最強のコサック騎兵部隊に伍するところまでに育てあげました。弟の秋山真之は海軍に進み、日本海海戦における斬新な戦術を編み出し、世界海戦史上例を見ない完勝への道を開きました。また真之の幼なじみの正岡子規は、文学者として、俳句・短歌を革新するとともに誰もが使うことができる日本語の散文をつくりあげました。つまり、秋山兄弟が外に対する国のまもりをかためた一方で、正岡子規は国の根幹にあたる言葉という分野で内のまもりをかためたといえるでしょう。

3人の業績こそ、明治の青年がもっていた青雲の志の有り様を伝えるのに、もっともふさわしい代表例です。この物語によって明治という時代が、まばゆいほど光り輝いてくるのです。

司馬遼太郎さんは物語の舞台となった明治という時代を、文化史からいっても精神史からいっても、長い日本の歴史の中でも特異な時代であると捉えていました。つまり、維新後、日露戦争までという三十余年は、たいへん楽天的な時代であって、この時代の人びとは前のみを見つめて歩き、のぼってゆく坂の上の青い天に、もし一朵の白い雲が輝いているとすれば、それのみを見つめて坂をのぼっていくというのです。これが「坂の上の雲」という題名の由来となっています。

物語を読み進めるうちに、私たちは自ずと日本の歴史の中における明治という時代に目を凝らしてしまいます。明治という時代を過ぎ去った過去として扱うのではなく、今に生かせるものとして再評価する試みは、今後もこの物語を起点として進められるでしょう。すなわち「坂の上の雲」によって、松山のまちづくりを考えると、明治の再評価をその土台とする必要があるでしょう。これは、司馬遼太郎さんが松山にのこしてくれた大いなる遺産と言えます。

<まちづくりの4つの視点>

私たちはこの物語から、次のような4つの感動や勇気を与えました。これらをまちづくりに反映させた<松山らしい>まちづくりビジョンは、独自性を発揮するものになるはずです。

1つ目は時代の<若さ> <明るさ>を讃えていることです。国として若かった日本は、理想をめざして明るく奮闘しようとする若者たちのために活躍する場を提供しました。たとえ社会のどのような階層に生まれた子供でも、ある一定の条件さえ整えば、まだ小さかった国家において、それぞれ重要な現場を任せられました。

明治のはじめから百年をはるかに越えて、日本のさまざまな分野で制度疲労ともいえるべき問題が起きてい

います。21世紀をむかえた今こそ、初心にもどって新たな若い国を作っていこうとする〈志〉が必要です。松山のまちづくりにとってもまた、この〈おもい〉は重要です。日本一のまちをつくらうという共通の理想に向かって、自らの手によるまちづくりを、やる気と向上心をもった市民と行政が共に携わって進めていく必要があります。

2つ目は主人公たちがことにあたって、さまざまな知識・情報を〈集め、比較する〉ことに力を注いだ点を高く評価していることです。秋山好古は騎兵戦術について、真之は海戦戦術について、古今東西の文献をしらみつぶしに探索することによって、不可能を可能としました。正岡子規も言葉や短歌・俳句を収集・分類し、新しい時代にふさわしい日本語をつくっていきました。松山の歴史、文化、風土のあらゆる情報を、収集、整理することによって〈松山らしさ〉すなわち松山のアイデンティティーを確立すれば、松山の情報が加速されるとともに、国際的にも観光文化都市松山として認知されていくことになるのです。

3つ目は3人が〈リアリズム〉と〈合理主義〉に従ってことを進めたことへの称賛です。秋山兄弟が日露戦争において、奇跡的な勝利をあげることができたのは、精神主義によってではなく、冷静かつ合理的な判断によってでした。また、正岡子規は事物を客観的に観察し、あるがままに描写する写生文を提唱しました。それを押し進めるなかで、情緒的な雰囲気にながれがちな日本語を革新することができたのです。今、現状をリアルに把握し、合理的な政策を立案することが最も求められているのは、環境と福祉の分野でしょう。美しい自然と住みやすい環境の調和をはかったり、互いに支え合う社会をつくるなど人に優しい福祉を実現するためには、リアリズムに基づく合理的な考え方が必要とされます。

4つ目は司馬遼太郎さんが正岡子規や秋山兄弟をとりまく人びとの〈人のつながり〉に着目している点です。彼らはたがいに〈励み、励ます〉ような交遊を重ね、困難にあたっては共同してことにあたりました。司馬遼太郎さん自身、自らを生涯一書生としていましたが、書生とは学校を終えたら学ぶことをやめてしまうのではなく、生涯学びつづける人のことです。〈書生の兄貴〉である正岡子規のもとには河東碧梧桐や高浜虚子の他、物語に登場する多くの人びとが集まりました。多くの人はこちらに教育の原点を見ます。まちづくりにあたって教育の問題を無視することはできません。のびのびとした教育をめざすためにも、〈書生の兄貴〉という言葉でもわかる、〈励み、励ます〉ことによって培われてきた人づくりの大切さが強調されます。

これら4つのテーマは、「坂の上の雲」の中のあちこちに散在しています。この大きな物語は、たくさんの小さな物語によって構成されており、これらのテーマはそれぞれの小さな物語の、あるときは個別のテーマとなったり、あるときはその起承転結を構成したりしています。また、これ以外にも「坂の上の雲」は、現代にさまざまな問題を提起しています。そして、それらは21世紀の松山のまちづくりにあたって、いずれも貴重な示唆に富むものです。これらをひとつずつ醸し出していくことこそ、理想に満ちていながら、しかも現実的な選択であるといえるでしょう。

「坂の上の雲」に共感した私たちは、細部に宿るこれらのテーマに共鳴し、21世紀のまちづくりの貴重な指針にしようとしているのです。